

■ 現在

□ 過去

■

「へえ、それでちょっと遅れたわけだ。まったく、僕はすっぱかされたかと思ったぜえ親友？」
グロースがレストランに到着し、遅刻の非礼を詫びると既に友人は出来上がっていた。

およそ一世紀来の旧友は、ほんのりと酔いを見せた顔へにやにやと胡散臭いチンシャ猫のような笑みを浮かべながら彼を迎えた。

「私はビジネスマンではなく魔術師だ。少しくらいの遅れは許してはくれないか」

「そりゃあないだろ親友。確かに君は魔術師だけど僕たちは親友だぜえ。親しき仲にも礼儀ありつてやつさあ。親友だからこそ時間は守らないと。それに、僕は君に捨てられたんじゃないかって思うだけでも胸が張り裂けそうで辛かったんだよお？ この痛みは一晚くらい君が付き合ってくれないと癒えないかもなあ……」

「その程度ならば仔細ない。……時間は五分前だったはずだがどのくらい待っていたんだ？」

「三時間と五分」

「……………」

「君と会えると思うだけでわくわくして三時間過ぎるのはあつという間だったなあ……。でもさあ……その後の五分は一秒一秒が身を切られるように思えてきもう泣きそうだったよお……」
「……………」

友人の奇行には慣れていたつもりだったが時々こうして予想もつかないことをしてくるから驚かされる。グロースがこれまで聞かなかっただけでいつもこのくらいは待っていたのかもしれない。度し難いものだと溜息をついたグロースは帚木輝日宮の隣に座ると辺りを見回した。

待ち合わせ場所となっていたレストランは自分たち以外に人影がない。おそらく友人がこのホテルごと貸し切ったのだろう。

「大丈夫だよお。今日一晩は誰も入らせないように言っているからさあ。ついでに『无名』で魔術的な干渉も物理的な干渉もシャットアウトしたから密談には最適さあ。……………」でさ！
話ってなんだい？ コイバナ？ 卒業旅行？ それとも親友にしかできない秘密の相談とか？

「似たようなものだ」

「デジマー！？」

「……………」

「当たり前だろ！ いいかい親友！ 親友つてのは秘密を打ち明けることで更にワンランク上の親友になれるんだぜ！ ああ、嬉しいなあ。こんな日があ、君から僕に秘密を話してくれる日が来るとは思わなかったよお！」

急にテンションが高くなった輝日宮はグロースに詰め寄ると若干食い気味にまくし立てる。グイグイとトリガラののような身体が押し付けられてとても痛いし顔が近くて居心地が悪い。

「離れろ」

「ひゃん！」

胸元を殴ると奇声を上げた輝日宮は身を翻して床に座り込む。

そして両手で胸をかばうとなぜか頬を染め目を潤わせてグロースを上目遣いで見上げた。

「だ、だめだよお親友……確かにそういう仲に進むのもいいかもしれないけど僕らにはまだ早いつていうかあ……。それに初めてが外つていうのはマニアックすぎないかなって……。もちろん君が望むなら僕は受け入れるんだけど……！」

「……………」

グロースは友人のこういうところが苦手だった。

■

「ところで、お前は私の本名がグローススティアンデライリーではないことは知っていたな？」

「ああ。それは前に聞いたねえ。その本名つてのは教えてもらってないけどさあ」

数分後、馬鹿笑いととも正気を取り戻した友人と向かい合ってグロースは本題に入った。

先程までの様子はやはり悪ふざけだったようで、仕切り直してからはおくびにも出していない。むしろ、五本目のワインをラッパ飲みしている姿には既にいつもの胡散臭さを纏っていた。

「で、それがどうしたんだあい？ 別に君がどこかに追われてようが非干渉地帯の紋章院なら追われようが問題ないしねえ。地域によっては魔術師としての新たな名前をつけてそちらを名乗るようにする風習もあるさあ。だけど、たぶん君が本名を隠す理由ってそういうことじゃないんだろう？ なにより僕に言う理由もないよねえ」

バリバリと齧っていた煎餅をワインで流し込んでしまうとグロースに向けニマリと流し目を送り背後に空の瓶を放り投げた。そしていつの間にか手にしていた新たなワインボトルを掲げるとガラスが砕ける音に重なって瓶の首が切断される。

「まあ、そっちは別として僕に急いで会いに来た理由はわかってるよ。君、バレちゃったんだねえ。秘密。たぶん次女のお……ああ！ ザイシャちゃんだっけ！ 確か君の記憶を納めた月零箱が溶け込んでたはずだ。僕の想像のつく限りではあの子お得意の契約魔術でも応用されて月零箱にハッキング受けたつてところかなあ？ ……くふふ、くふふふふふ。君の娘らしくなかなか強かじやないか」

「本題とは関係ない話だがな。最上位権限が必要なものは無事だったが、偽装IDで他の機密はあらかた抜き去っていったよ。第三呪詛に適合する以上の才は無いと侮っていたが……いやはや、人の可能性とはわからないものらしい」

「いいねえ。ザイシャちゃんかあ……うちにスカウトしちやおうかなあ……？」

「あの子はフリーランスの魔術師だ。誘いたいならお前の好きにしろ」

グロースがそつげなく言う。と輝日宮はつまらなさそうに頬杖をつく。

「いいのかい？ ザイシャちゃんがスコーパーリアに来たら逃さないつもりだけどお？」

「挑発には乗らん。お前に雇われてもあの子なりにやっていくのはわかっている。お前がそうさせることもだ」

「へえん。君もつれない男だねえ……。まあ、そういうところが好きなんだけどねえ僕も」

鼻を鳴らし、ワインボトルを啜えて喉を鳴らすとまた背後に向けて空になった瓶を放り投げた。今度は手元は空のままだった。酔っているのか少しふらつきながらテーブルの向かいのグロースのところへ近づいていく。

「それでえ？ だいたい依頼内容は想像つくけどお何を頼みたいんだあい？」

「想像がつくのに言う必要が？」

「僕は君のことならなんでも知ってるよお？ なんでもわかる。親友だからねえ。君だけしか知らないことだって、千年くらい君のことを思い続けている僕なら思いあたるさあ。ほらあ、長年一緒に暮らした夫婦は言葉一つで意思疎通できるって話あるだろ？ あれと一緒だよ。僕は君を愛してる！ 君が僕をどう思っていたとしても、僕にとっては世界で一番の親友だ！ だからわかる。今日、君が僕に会いに来た理由も。これから何を託そうとしているのかも。全部、ぜんぶねえ。……でも、それじゃあ寂しいじゃないかあ親友。僕がココソと探った秘密と君が打ち明けてくれるそれは別物だ。万年筆で書き連ねたのが僕でも君でも、言葉の裏にある事実は全く一緒だってことは十分にわかっている。でも、わかっているからこそ」

危なっかしく近づいてくる友人を横目で追っていると輝日宮はグロースの隣の椅子に勢い良く座り込んで来る。そして、視線に気がついたのか、にへらとしてグロースにしなだれかかり、濡布をかぶせたように輝日宮の肢体がびったりと吸着した。

一センチ先まで近づいた幼い頬は朝焼けのように紅潮し、目は爛々として、唇は紅も入れていないのに血のように赤い。かすかな膨らみがグロースの腕を包み、心なしか耳にかかる寂しげな息までがどこか熱を帯びているように思えた。

「君の口から聞きたいのさあ」

今日くらいいさ、と。泣き出しそうに潤んだ輝日宮の瞳がまっすぐグロースを見ていた。

掴まれた腕は万力のように引き絞られていて逃がす気は欠片もないらしい。

「……………はあ。いいだろう」

グロースは溜息をついて肘を曲げると友人の胸元を突き上げた。

すると、「ひゃん！」という聞き覚えのある奇声に続いて、足元で先程の茶番を焼き増したような姿の輝日宮が彼を見ていた。やはりまた悪ふざけを始めたのだろう。そう判断してチシヤ猫のように笑っている輝日宮に構わずに話を始める。

「それでは依頼の前にひとつ、希望通り昔話をしよう。あれは、まだアンディライリーという姓がひとりのものであったころ。ただのクロニクと老魔術師ボルチェイブ・ロオストの話だ」

□□

とある、冬に閉ざされた大地。

煙突から黒雲を吐き出し続ける、村外れの森の粗末な小屋にて。

□□

『お父様、お父様。起きてください、お父様』

聞き慣れた幼い声がパスを通じて、靄がかった思考の中へ響く。

安楽椅子でうたた寝をしていたボルチェイブ・ロオストはゆったりと目を開けた。

いつの間にか暖炉の火はまだ消えていないが熾火というにも小さすぎるくらいになっているがパチパチ爆ぜる心地よい音はいまだに残っていて、彼も釣られてウトウトと船を漕ぎかけた。

『お父様、お父様。……お父様！ 起きてください！ お父様！』

「……ああ、私は起きているよクロニク。そう目覚め越しに怒鳴らないでくれ」

『それならば最初から返事してください。そうでないと私にはわかりません』

「すまないなあ。もう私もずいぶん年だから、鈍くなってしまったんだよ」

森に降り積もる雪のように深く、ネコヤナギの新芽のように張りのある、それでいて枯れ落ちた白樺のように老いに満ちたバスヴォイスが狭い部屋の中に響いた。どう見積もっても三十代くらいにしか見えないこの男の口から発せられたとは思えない奇妙な声だった。……当たり前だ。彼の見かけは若々しくても、近くの村で一番の長老よりも長く生きているのだから。

おとぎ話に現れる化物。吸血鬼やドラキュラ、ノスフェラトゥとも呼ばれる幻想の王たち。つかの間の夜と、死を忘れた身体に永遠の春と快楽を謳歌する霊長の超越種。ボルチェイブもその末席に在る者であり、かれこれ数百年前に魔術で死徒になってから先はこの姿のままだ。

が、死徒と言ってもボルチェイブは他の死徒たちのように徒に人を殺めたり、ましてや死都を作ろうとはしない。人の幸福を歌う妖精コリヤダの血を半分継いだ彼にとつて利己のために他人を害することなど基本的にはもつての他。身体を保つために不可欠な人間の血も、村の病人を診たときに瀉血したものを大事に使っているくらいだ。時たま血を盗むこともあったが、傷は念入りに治すし、代わりに豊穡の呪歌で村を祝福しているのだから駄賃のようなものだ。なぜそこまでして生きていたのかと言えば、達成するべき命題があるからに他ならない。

ボルチェイブの挑む命題、それは『第六魔法への到達』だ。

いや、どちらかといえば『人類全てが幸福になること』といったほうが正しいかもしれない。絵に描いたような話だが、しかし彼にはそこに到達し得るだろう才能もあった、受け継いだ知識も技術もあった。安易な言葉だが彼は天才だったのだ。その天才が生涯を捧げ書き上げた譜面は完璧で、非の打ち所もないもので。……それでも、手を届かせることは叶わないまま、気づけば劣化をなんとか留めていた魂もゆつたりと腐り落ちてきた。

結論から言えば時間が足りなかったのだ。

あと数百年も時間があれば命題は達成されていただろう。あるいは、彼の意志を継いでくれる後継者が一人でもあれば芽は残っていた。問題はその両方を持ち合わせなかったことだった。伴侶を得なかったことを後悔する日が来る、などと昔の彼が聞けば鼻で笑っただろう。

ボルチェイブロオストは誰もが認める天才中の天才で、それは若き日の彼も例外ではない。彼自身、自分の後のロオストに己以上の才を持った者が現れるなど毛ほども信じていなかった。傲慢で、慢心と過信に満ちていた。だが、その若さが許されるほどの才が備わっていたのもまた事実。仮に、ロオストの血を百代重ねようと彼一人に及ばなかっただろう。

しかし、若き未熟は熟れる日が来るからこそ許されるもの。未熟の時間が長ければ長いほど痛烈なしつぺ返しがやってくる。その理のうちにあるのは彼も例外ではなかった。

己以外の誰にそれが成し遂げられよう、

そう才に溺れて後継者を育て未来に託すという魔術師の当前さえ失念し、人並みの幸せさえ必要ない、人ならざる身の己が長き生を注ぎ込めば時間は足りる、そう思いながらはや七百年。

計算の果て、己の寿命と命題の結実までの時間がどうやっても釣り合わないことを理解した。そうして、永き熱狂から冷めた先には、死徒化で生殖能力を失って、他に後継者の宛もない偏屈な老人が、歌う者の永劫現れることのない譜面の山に見窄らしく埋もれているだけだった。残された時間はせいぜい保って二十余年。

十分な魔術回路と、彼の後継に足る才覚と適正を持つ人間を見つけ、ロオストの魔術師へと育て上げるまでにかかるだろう年月に比べれば流れ星の煌めきが空に弧を残すほどしかない。では、魂が腐敗しきった後も延命して自分でもやり遂げるか。それもダメだ。完全に腐ってしまったえば想定していたようにはいかないだろうとはボルチェイブもよくわかっていた。

ボルチェイブが人類の敵対者である死徒になった後も人を救おうと思えるのは、人であった頃の魂が残るからこそ。故、朽ちれば願いが歪む。それでは、譜面の中にノイズが混じる。だから決めたのだ。もう何もしないということ。

熟すること無く腐り落ちた生涯を受け入れ、空虚な生の終わりを待ち続けると。

平たく言ってしまえば、彼は隠居することにしたのだ。

彼をお父様と呼ぶクロニク——数百年かけた研究の中で唯一完成した彼の命題への解答要素、『月暈箱』に宿った人格——と共に。

それでも、未だに生涯の成果が奏でられる日を夢に見てしまうのは未練だろうか。

人類救済の『はじまりの歌』へ至る譜面は焼き捨てたが、それらを全て記憶させたクロニク——『月筆箱』が残っていたら同じこと。

それが無意味だとわかってはいるのだ。わかっているけど、文字通り全てを費やして後一步に肉薄したはずの未来を、もう届かないからと割り切れるほどボルチェイブは強くなかった。

「ああ、本当に。なんと無様だ」

『どうかされましたかお父様？』

「いや、気にしないでくれ。ちよつと独り言を言っていたんだ」

『……あまり、そう思いつめないでください。お父様が朽ちても命なき私は残り続けます。ならばいつかお父様を継ぐ方が……』

（——その日を、夢見てしまうからこそ無様なんだろうね私は）

昨日より摩耗していることを知りながらも未練を捨てきれない自分を恥じて、もう後一步を踏み出せたイブを夢に見る毎日。枯死しかけた思考は耄碌してしまった老人のように何時間も安楽椅子から暖炉の火が燃えるのを見て過ごしていたし、血を摂取する頻度も研究に励んだ頃より格段に減って、今や外に出るのは、歌を歌うか、村人に菓を作ってやるかくらいのもの。

最近は起きているのか寝ているのかも自分ではわからなくなってきた、来客のたびにクロニクに起こされるようになってきた。今日もまたクロニクに呆れられ、年を取ったと実感しながら、ボルチェイブが積み重ね無駄にした物の一端を来客に披露する。

そんな、いつもの一日のはずだった。

□□

「それで、クロニク。もしかして私は来客を待たせてやしないだろうか？ 一昨日のようにずっと待たせてしまっていたなら悪いことをしてしまった」

ふわりと欠伸をしながら立ち上がったボルチェイブは暖炉の薪を足し入れながら尋ねた。「外で凍えていないといいんだが……」暖かな日にやってきた幸運な来客を思い出していたのだ。

すると、クロニク——つまり安楽椅子の隣の黒い正方形、礼装『月筆箱』——が彼を起こした時のように念話で応える。

『いいえ。今日のお父様は不思議なくらい素直に目覚めました。普段の待ち時間に慣れされた村人なら自分が妖精に悪戯されていることを疑うほどに』

「それは良かった。私だけなら、年寄りだからゆっくりでいいのだけど。この季節は早ければ早いほどいいのだからね」

『そういうものですか？』

「ああ。そうだ。吹雪が終わるのも、暖かい家に帰るのも、春が来るのも、どれも早いほどい

いものなのだよ。さ、クロニク。ドアを開けてお客様を家に入れておやりなさい。きつと、暖炉に当たるのも早い方がいい」

『わかりました』

クロニクの返事に続いてドアに回路のような模様がフツと浮かび上がる。

すると、実に不可思議なこと何の力も加わっていないドアがひとりでに動いて軋みを立てながら開く。ボルチェイブはそれを気に留めず膝にかけ毛布を畳み、鍋を火にかけて客に出す湯の容易をするとまた安楽椅子に戻る。そして手を組んで一度瞠目すると、椅子を揺らしながらドアの向こうから入ってくる彼もしくは彼女に目をやった。

来客は雪除けらしきボロボロのマントを羽織った子供のように小さな人影で、腰に届くような長髪のせいもあってひと目見ただけでは性別不詳であった。それでは、精囊と毛髪のどちらに魔力が溜まっているかで見分けようか、とまで思った時によりやく気がついた。どうやら、客人はボルチェイブと同じく魔術師のようだ。

「……貴殿は、魔術師のボルチェイブロオスト殿で、よろしいか？」

魔術師は間口に立ちん坊のまま、掠れた声でそう言った。

一瞬、寒さにやられて声を枯らしているのかと思ったが、腐りかけの魂から湧き上がる食欲に気がついたボルチェイブは、少し鼻をひくつかせると途端に表情を固くして枯れ木のような身体を安楽椅子から飛び上がらせた。父の異変を受けて『月霏箱』から声が響く。

『お父様？』

「クロニク、扉を閉めて結界を発動させなさい。人払いと『炎囲』、それと『呪檻』もだ」

『了解しました。お父様は？』

「歌って来る。……ああ、そうだ。忘れていた。結界の立ち上がりを確認できたら彼に治療の魔術を施してやってくれ。腹の空く匂いでわかったが、どうやらひどい怪我をしているようだ」

『了解しました』

クロニクに指示をしながら戸棚を漁っていたボルチェイブは、なにやら黄色っぽいドロリとした液体で満ちた木壺の中から赤く染まった白樺の皮を取り出すと思いつき切り噛み千切った。

瞬間、身に纏った濃厚な雰囲気は霧散し、充血した眼が血のように朱く染まると共に老人は突然肉食獣にでもなってしまったように獰猛な気配を漂わせ始めた。

……いや、なってしまったのでは無い。これが本来の彼だ。傲慢と慢心に満ち、人の救済を願いながら博愛を忘れたロオストの鬼子。人を傷つけることを厭うコリヤダの血を引いていたがために抑えられていた死徒としての本能が血の薫香によって目覚めたのだ。

白樺の皮に染み込んだ血に酔うボルチェイブは、眼をギラつかせて黒曜石のナイフを乱暴に引き抜くと指の腹を浅く切り裂いた。微かに痛みをしかめるとゆっくりと深呼吸して我を取り戻す。全力で歌うには血が必要だったがこのままでは怪我人を襲いかねなかったからだ。

「……はあ、こればかりは一生活れなかったな。仕方のないことだが」

自嘲するように笑ってナイフの血を払うと、『月琴箱』から念話が飛んできた。

『お父様。『炎罫』『呪檻』ともに起動準備完了しました。戸を閉めると同時に起動します』

「ありがとうクロニク。それでは、行ってくる」

『お気をつけて』

「うん」

歌うだけのことで気をつけても何もないだろうに。なんて考えながら後ろ手に扉を閉めると指示していた通りの結界が小屋の周りに張り巡らされる。

ひとつは人払い。村人が巻き込まれないように他より先に展開されていた。ひとつは『炎罫』。迎撃用の結界。そして、最後のひとつ『呪檻』。小屋周辺と森全体をそれぞれ覆うように二重に張り巡らされた大小の呪い除けの結界は防御に使うものではなく……。

「さて、これを歌うのは久しぶりだが……上手く歌えるだろうかねえ。でも、呼ばれもせずに勝手にやってきたのはそっちなんだから多少下手でも我慢してくれよ」

トントンと足で拍子を取りながら二、三度呼吸を整えると冬の森の空気の乾いた匂いの中で自己主張する悪意と敵意の鼓動に向けて老魔術師ははにかみながらお辞儀をした。

「それではご清聴いただこう。攻性呪歌第八番『落葉』より『鳥兜』

二つの呪い除けの結界の狭間に、呪歌が響いた。

□□

吐血して倒れる死体ら全て鼻を頼りに探し、小屋まで運び終わった頃にはすっかり日が暮れていた。息を忘れた血袋たちの首をナイフで掻き切り、白樺の皮を詰めた水瓶へと流し込んでいつも通り保存の魔術を掛けたボルチェイブは戸を開けて小屋に入ると、粗末なベッドに寝かせていた怪我人が横になったまま彼を見ていた。

「君の追手のことなら安心しなさい。皆、もう君を追ってこれないところに行ってしまったよ」

「……すまない、ロオスト殿。貴殿を巻き込んでしまった」

「気にしないでくれ。こう見えて私もかなりの年寄りだ。失って惜しい命はどうに忘れたさ」

たぶんね、と付け加えると薬草をベタバタと貼られた魔術師に向かって笑ってみせた。

「どうにも君の追手も魔術師のようだったから構わず始末してしまったが、何か訳でもあるのかい？」

「……すごいな。そんなことまでわかるのか。父に聞いていた話は本当だったようだ」

「まあ、死徒だからね。それにこの一帯は私の工房のようなものだ。森に誰かが入れば魔術師かそうでないかくらいの区別はつく。ところで、父と言ったね。お父さんから私のことを？」

「私の父、レグゼが貴殿についてはよく話していました。なんでも、この辺りの森には未来を見通すこともできる素晴らしく腕の立つ魔術師が数百年も昔から工房を構えていると」

「そして、その才能を未来の人々を救うだのとよくわからない妄想に費やしている？」

「……………はい」

「ははは。これは手厳しい」

七百年も昔にロオストの者たちに同じことを言われたのを思い出して老魔術師は笑った。
当然だ。今はまだ根源が近い。誰ひとりとして滅びの未来など予期しない。

……いや、そもそも人類などという括り自体がこの時代には存在しない。アンディライリー氏がボルチェイブの考えを理解出来なくて然るべきなのだ。少なくともこの地でそれを解せるのは限定的な未来視を持つボルチェイブと、あとは助手代わりのクロニクくらいのもんだろう。

ボルチェイブが後継者作りを諦めた理由のひとつがそれだ。この時代では早すぎる。だから誰もボルチェイブの命題の重要性を理解できないし受け継がれたそれが実行されるはずがない。彼が自分ひとりで成し遂げることに固執していたのも同様である。

「さて、巻き込まれたには理由を聞きたいな。君がなぜ追われていたのはわかっているが私のところにやってきた理由がいまいち掴めないのだよ」

「私が追われていた理由はわかるのですか？」

「うん。手当をしたときに君の腕に刻印があった。で、追手の彼らにはなかった。そして血の味が似通ってたからね。たぶん、後継者争いで君が選ばれたことを不満に思い襲ってきたとかそのへんだらう？ 違うかい？」

「……………」

ポカーンと若者は口を開けて尊敬の眼差しをボルチェイブに向けていた。

ふふんと得意げにボルチェイブが鼻を鳴らすと、

『「つだけ訂正するとすればその仮説はお父様でなく私が算出したということですね』
「うぐっ」

冷ややかなクロニクの声がボルチェイブを刺した。

「だ、誰だ?!」

一方で若者は上半身を持ち上げて壁にもたれかかりながら、警戒するようにキョロキョロと小屋の中を見回した。反撃の用意を始めているようで魔術回路が淡く光っている。

『落ち着いてください。私はクロニク・ナビ・ナビ。そちらの老人の使い魔のようなものです。お父様があなたを害する気がないのなら敵に回るつもりはありません。少なくとも、今は』

「使い魔…………？ それにしては姿が見えないが……」

『すぐ近くにいますよ。具体的に言えばあなたの隣に』

「隣…………？」

若者はボルチェイブに向けて胡乱な表情を向ける。

ボルチェイブがフルフルと首を振ると目をパチクリさせて首を傾げた。

「あの、もしや貴殿が私をからかっているのか？」

「私はからかってなんかいないさ。私の下だよ」

「下……?」

『お父様が座っているのが見えませんか?』

ハテナマークを浮かべながらベッドから身体を伸ばす若者の前でボルチェイブが立ち上がる。すると、そこには老魔術師が椅子代わりにしていた箱のようなもの。幾何学模様が入った大きな直方体状の鉱石、『月雫箱』が鎮座していた。

「……………ロオスト殿は変わった使い魔を使うのだな。いや、貴殿には驚かされるばかりだ」

『正確には使い魔ではなく礼装です。が、あなたの認識なら使い魔が近いかと思ひまして』

「もう、なんだか、すごいなあ……ロオスト殿の手にかかれば礼装も喋るのか……」

既に驚きも品切れになっているのだろうか。若者はしみじみとそんなことを言うと、何やら自分を納得させるようにココココと頷いた。

『驚かせるつもりは毛頭なかったのですが』

「楽しんでくれるならいいじゃないかクロニク。それと、これだけ動けるようなら食事も喉を通るだろう。傷を治すには食事が一番だ。話の続きはそれからだ」

『間違つて人肉や血を出さないでくださいね』

「出すわけ無いだろう！ 私もそこまでボケちやいないぞ！」

『どうですかね。現に大事なことを聞き忘れておられませんか?』

「えっ、なにかあったかな?」

首を裂いたナイフはもう洗ったし、などとボルチェイブが指折り数えているとクロニクは呆れはてたように溜息をついた。

『お客様。食事の前にひとつ質問しても良いですか?』

「あ、ああ。構わないぞクロニク殿」

『あなたの名前は?』

あつ、とボルチェイブと若者が同時に声を漏らした。

「す、すまない！ 押しかけておいて名乗りもしないなどと」

「ああ、いやいや！ 聞かなかった私も悪いといふかなんというか」

わたわたと慌てる若者はなおも食い下がる。

「だが、やはり非礼を働いたのは私だから……」

『話が進みません。いいから名乗ってください』

「そ、それもそうだな。うん。悪かった」

冷ややかな声のクロニクに促された若者は腰まで届かんばかりの美しい白髪をたなびかせ、その髪と同じく真っ白な肌の中で燃え上がるように赤く焔く瞳をボルチェイブに向けてると、

「私はレグゼィアンディライリーの子、ザイシャ。ザイシャィアンディライリーだ」

そう、誇らしげに名乗りを上げた。